

8/24(火)開幕 東京2020 パラリンピック競技大会

障がいのあるトップアスリートが世界一を懸けて争う東京2020パラリンピック競技大会が間もなく開幕します。事故で右腕に障がいを負いながらも、新潟から金メダルを目指して走り続ける選手に意気込みを聞きました。 **問** スポーツ振興課(☎025-226-2601)



勤務中は利用者と笑顔で触れ合う

永田選手は結婚を機に東京から新潟へUターン。障がい福祉の仕事に携わることになり、第一線の競技者としては引退するつもりでした。しかし、勤務先の同僚の勧めもあって、「これまで全く考えたことがなかった」というパラリンピックに

故郷で新たな挑戦、再び世界へ

「入院中も、ベッドから降りることができず、毎日悔いのないようでした。事故の後、毎日悔いのないようでした。と、より真剣に競技に向き合いました。事故から2年半後には100キロウルトラマラソンでその年の世界ランキング5位のタイムを記録。その後も国内外のレースで活躍し、2015年には念願の100キロウルトラマラソン日本代表として世界選手権に出場しました。」



マラソン(T46クラス)
新潟県身体障害者団体連合会
永田 務 選手

新潟から金メダルを狙う

障がいを抱えながら日本代表に

「マラソンを始めたきっかけは「小学5年生の時、ダイエツのため」という永田選手。中学校では5千メートルなどの長距離種目に取り組み、卒業後も働きながらウルトラマラソン(フルマラソンを超える距離を走る競技)を中心に走り続けていました。」

「そんな折、2010年にリサイクル工場での勤務中、事故に遭い重傷を負いました。1年以上の入院生活、10回の手術の結果、右腕の筋力低下とまひが残りましたが、「走ることをやめようとは全く考えなかった」と言います。」「入院中も、ベッドから降りることができず、毎日悔いのないようでした。事故の後、毎日悔いのないようでした。と、より真剣に競技に向き合いました。」

職場全体で選手をサポート



新潟県障害者交流センター
計良 拓海さん

永田選手は普段、当センターのトレーニング室やプールの監視業務、施設利用者を対象とするスポーツ教室の指導に従事しています。勤務態度は真面目で人当たりも良く、周りの職員や利用者の方からも、とても信頼されています。

永田選手が競技に集中できるよう、勤務時間を調整したり大会参加手続きを手伝ったりと、職場全体でサポートしています。どんな結果でも「参加して良かった」「やり切った」と思えるような大会にしてほしいと思います。

「挑戦することを決めました。昨年3月にオーストラリアで障がいの程度の判定を受け、T46クラス(上肢障がいなど)の出場資格があることが判明。今年2月、びわ湖毎日マラソンでアジア新記録となる2時間25分23秒を記録し、見事に日本代表の座を射止めました。」

永田選手は6月下旬から県内で合宿を行い、9月5日の大会本番に備えています。「これまで練習したから大丈夫、と言えないところがマラソンの難しさであり魅力でもあると思います。新潟で最後まで頑張れる脚をつくり、戦ってきます。ぜひ当日も応援してください。金メダルを目指す永田選手に注目です。」



妙高高原で走り込む永田選手(右)

TOPIC

東京2020オリンピック競技大会 熱戦開催中

東京2020大会
新潟市関連情報は
こちらから



新潟市ゆかりの選手が出場

水泳男子100mバタフライに水沼尚輝選手(新潟医療福祉大学職員)が、7人制ラグビー女子に原わか花選手(秋葉区出身)が出場しました。



▲水沼尚輝選手



▲原わか花選手

フランス空手チーム 新潟市内で事前合宿を実施

大会出場予定の3選手が8月3日(火)まで亀田総合体育館(江南区)で事前合宿を行っています。各選手には新潟市民からの応援メッセージと横断幕をプレゼントする予定です。 ※競技は8月5日(木)~7日(土)に日本武道館で開催



▲スティーン・ダ コスタ選手
(男子組手67kg級)
2018年世界空手道選手権大会優勝



▲アレクサンドラ・フェラッチ選手
(女子形)
2018年世界空手道選手権大会第5位



▲レイラ・エルト選手
(女子組手61kg級)
2018年KARATE1プレミアリーグラバト大会優勝